



生成AIとローコードで 実現する業務改善

構想だけで終わらせない
実行までを確実に進める実践ステップ



はじめに

「業務改善の要望を受けるものの、手が回らず対応できていない」

「利用部門のニーズに応えきれていない」

DX推進などデジタル技術を活用した業務改善に取り組む企業も増える中、
このような悩みを抱えている情報システム部門の方も多いのではないでしょうか。

IT人材が不足する中で、セキュリティ対策や新システムの企画検討など、情報システム部門にはさまざまなミッションが与えられています。
このような背景もあり、**業務改善に取り組みたくても時間がとれず、PoCや要件定義の段階で止まってしまう“構想止まり”**のケースも少なくありません。

利用部門のニーズに応え、業務改善を実行まで確実に進めていくためには、**生成AIとローコード開発の活用**がポイントです。

本資料では、**生成AI時代の業務改善**をテーマとして、**生成AIとローコード開発**を活用し、構想止まりの課題を乗り越え、
現場の改善要望をスピーディに形にするためのアプローチについてご紹介します。

「頼られる情シス」「スピード感のある情シス」を目指されている方は、ぜひお読みください。



目次

1. あなたはいくつ当てはまる？業務改善がなかなか進まない現場あるある
2. 構想の実現を阻む3つの壁
3. 課題解決のカギは生成AIとローコード開発
4. 構想を実現する4つの実践ステップ（STEP1・STEP2）
5. 構想を実現する4つの実践ステップ（STEP3・STEP4）
6. IM-Copilotが実現する"構想から実行"の業務基盤
7. IM-Copilotが実現する"構想から実行"の業務基盤 ①要件定義・設計
8. IM-Copilotが実現する"構想から実行"の業務基盤 ②プロトタイプ設計
9. IM-Copilotが実現する"構想から実行"の業務基盤 ③プロトタイプ化
10. IM-Copilotが実現する"構想から実行"の業務基盤 ④実装・継続改善
11. まとめ



あなたはいくつ当てはまる？業務改善がなかなか進まない現場あるある

業務改善を進めたい、もしくは他部署から業務改善の要望を受けても、**実現に至らない**ケースは決して珍しくありません。

以下のような状況を経験したことがある方も多いのではないでしょうか？

現場でよく見られる“構想止まり”的実態



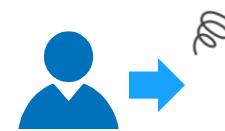
改善案は出るが「隣の部署と調整してから」と言われたきり、時間が経ち、
部門連携が進まずに立ち消える



情シスの体制が限られており、
要望の取捨選択や要件の具体化に
手が回らない



過去の取り組みが**属人化**しており、
プロセスとして整理されていないため、
構想ごとに毎回ゼロベースでの検討となっている



業務改善を進めたいものの
「現状のままで問題ない」という意見
多く、改善に至らない

IPA「DX動向2024」によると「十分に部門間で協調できている」と回答した企業は全体の7.2%にとどまっており、
DXを推進する人材についても「量が不足している」と回答した企業は約8割にのぼるという結果も明らかとなっています。
さらに業務改善を含めたDX推進においては、属人化・ブラックボックス化が課題としてたびたび指摘されており、こうした障壁が“構想止まり”的温床であるといえ
るでしょう。

出典：IPA「[DX動向2024](#)」p.25、p.64

構想の実現を阻む3つの壁

なぜ業務改善はスムーズに進まないのでしょうか？その背景には、以下のような3つの壁が存在します。

構想が実装までたどり着かない理由

① プロセス設計の壁



進め方が定まらず、具体化が遅れる

- 要件定義に時間と手間がかかってしまい、初動でつまずくこと
- 要件定義を進める中で現場の期待とズレたり、担当者により内容や精度にばらつきが出たりする

② 合意形成の壁



イメージの共有が難しく、認識がそろわない

- テキストベースで議論を行った結果、実装イメージがつかめず、関係者間の認識が合わない結果に

③ スピードの壁



意思決定が遅れ、熱量が失われる

- 合意形成に時間を要てしまい、議論が長期化する中で改善の熱量が失われ、実装に至らず業務改善の取り組みがしぼんでしまう

POINT

このように、構想が実装までたどり着かないのは、構想を具体化し、合意を得て実装へつなげる一連のプロセスにおいて、「プロセス設計」、「合意形成」、「スピード」の観点に課題があるためです。

課題解決のカギは生成AIとローコード開発



構想から合意形成、実装までのスピードと精度を高めるには、**生成AIとローコード開発**の活用が効果的です。

生成AIとは？

テキストや画像、コードなどを、人間の指示に基づき自動生成する人工知能技術です。2022年にリリースされたChatGPTをきっかけとして、爆発的に利用が拡大しています。

ローコード開発とは？

最小限のプログラミングでアプリやシステムを構築できる開発手法です。IT人材不足などを背景に、企業における利用が拡大しています。

生成AI×ローコード開発による効果

これらの技術を組み合わせれば、前述の各課題に対し以下のような解消が見込まれます。

課題の観点	解消されるポイント
① プロセス設計	生成AIのプロンプトやローコード開発の成果物を再利用することで、属人性を防ぎ、再現性のある業務プロセスの構築を支援
② 合意形成	モック画面やプロトタイプなど「実際に見て触れられるもの」をベースに議論して、関係者間の認識の不一致を減らし、納得感のある合意形成を実現
③ スピード	生成AIとローコード開発により、生産性を高めつつ、要件定義から実装までを高速化

POINT

生成AIとローコード開発を活用し、構想から実装までを一貫して設計すれば、プロセス設計の効率化、合意形成の円滑化、迅速な実行を実現し、**業務改善の実行力を高めることができます。**

構想を実現する4つの実践ステップ（STEP1・STEP2）

ここからは、具体的に生成AIとローコード開発を活用して業務改善を進めるための4つのステップを解説します。

STEP
1

生成AIで素早く構想をモックに

- 現場の業務課題や構想を自然言語で生成AIへインプットすれば、それに合わせた入力項目や画面構成を自動生成できます。
- 生成物をもとにモック画面も自動生成し、意見収集を進めます。
- AIによる自動生成により、担当者による精度や品質のブレを減らし、再現性のある要件定義を実現できます。



STEP
2

ローコード開発でプロトタイプ化

- 収集した意見を踏まえ、ローコード開発を活用して初期プロトタイプを迅速に作成します。
- モックで共有した画面案をもとに、実際に操作できる形へ落とし込むと、関係者の認識をさらにそろえやすくなります。
- 動作イメージを検証環境で確認しながら、現場の声を取り入れ修正・改善を重ねるプロセスをスピーディーに回していきます。



構想を実現する4つの実践ステップ（STEP3・STEP4）

STEP
3

部門横断で意見を収集し改善

- モックやプロトタイプを用いて部門横断レビューを実施し、具体的な業務改善イメージを共有します。
- 直接的なユーザーだけでなく、組織全体の管理統制や内部監査の観点からも意見を集約し、改善点や要望を実装に反映します。



STEP
4

実装・継続改善

- モックやプロトタイプで収集した意見を踏まえ、ブラッシュアップを実施し、本番システムとして実装を行います。
- 本番環境への展開後、ユーザーの利用状況や使用感を確認し、定期的に改善することも重要です。



POINT

生成AIとローコード開発を用いたこれらのステップにより、**最小限の工数・期間で実装が可能**となり、部門横断での意見収集もしやすくなります。情報システム部門の実行力も高まり、**スピード感を持った信頼される組織へ**と変化できるでしょう。

IM-Copilotが実現する"構想から実行"の業務基盤

生成AIとローコードの連携を実現するのが、intra-mart Accel Platform上で動作する「IM-Copilot」です。



IM-Copilotとは？

IM-Copilotは当社が提供するエンタープライズ・ローコードプラットフォーム「intra-mart Accel Platform」上で生成AIを利用できる基盤機能です。IM-Copilotを利用すれば、高速なモック作成やプロトタイプ開発を実現できます。

IM-Copilotによる「実践ステップ」の実現

IM-Copilotにより、前述した4つのステップを実現できます。

ローコード開発基盤であるAccel Studioと組み合わせれば、プロトタイピングから実装・継続的改善までをスピーディに展開できます。



IM-Copilotが実現する“構想から実行”の業務基盤

①要件定義・設計のAI支援

要件定義・設計の初動をAIで支援

要件定義・設計の初動においては、**IM-Copilot**と対話しながら、要件や設計を具体化します。

画面項目の定義、画面イメージの可視化、さらにモック作成まで、生成AIとチャット形式で対話を行いながら

要件や設計をブラッシュアップすることも可能です。

さらに、生成AI活用のためのユースケースカタログを参照すれば、要件に対してどのようにAIが活用できるかの検討も素早く可能となります。

The screenshot displays two main components of the IM-Copilot interface. On the right, a detailed view of a user story titled 'テスト' (Test) is shown. It includes sections for 'ユースケース概要' (User Case Summary), which notes '検証用サンプルから実際の操作手順を作成する。' (Create actual operating procedures from sample verification), and '使用例' (Usage Examples) which lists various API endpoints like 'API 対話ツール', 'API データ整理', 'API 検索', 'API システム構築', 'API セキュリティ', and 'API 実装'. A prominent yellow button at the bottom right says 'アストラクチャーを生成する' (Generate Structure). On the left, there is a grid titled 'For Business' containing six boxes: 'ドメイン' (Domain), '入力支援' (Input Support), 'ガバナンス' (Governance), '意思決定' (Decision Making), '分析' (Analysis), and 'サイントラクション' (Sign Transaction). Each box has a small icon and a brief description.

IM-Copilotが実現する“構想から実行”の業務基盤

②プロトタイプ設計の効率化

データ構造や画面定義の自動提案でプロトタイプ設計も効率化

IM-Copilotにより、アイデアを簡単にプロトタイプとして実現できます。

例えば、手書きの画面イメージを読み込ませて、intra-mart Accel Platform上で動作するプロトタイプを自動で生成することも可能です。画面イメージに対応する形でデータ項目定義や画面定義まで自動で実現します。

イメージと異なる部分があれば、AIとやり取りしながら改善することも可能です。

The screenshot shows the "Application Creation Assistant" interface. On the left, there is a handwritten screenshot of a form titled "社内備品登録" (Internal Asset Registration) with fields for "備品ID" (Asset ID), "備品種別" (Asset Type), "備品名" (Asset Name), "貸出期間" (Borrowing Period), "貸出ユーザ名" (Borrower Name), and "備考" (Remarks). A callout bubble from this image points to the AI icon in the center of the screen. The center of the screen displays the AI interface with the text: "作成したいアプリケーションの名前や目的、必要なデータ項目などを教えてください." (Please tell me the name and purpose of the application you want to create, as well as the required data items.) Below this, another callout bubble points to the AI icon with the text: "添付した画面からアプリを生成してください。" (Please generate an application from the attached screen.) To the right, two windows show the generated application. The top window is titled "アプリケーション管理 備品管理アプリ - 詳細" and lists several content items under "画面コンテンツ": "高画質一覧画面" (High-quality list screen), "高画質登録・編集画面" (High-quality registration/editing screen), "高画質登録・登録・返却画面" (High-quality registration/registration/return screen), "高画質登録・編集画面" (High-quality registration/editing screen), and "高画質登録・登録画面" (High-quality registration screen). The bottom window is titled "備品管理アプリ 一覧画面" and shows a table of asset management data with columns: "主キー", "貸出備品", "管理番号", "重積", "貸出日", "返却日", and "返却". It lists five entries: PC1, PC2, PC3, タブレット, and a row for "タブレット" with values 0, 4.44, 2023/12/14, 2023/12/20, and false. A modal window titled "追加" (Add) is open at the bottom.

IM-Copilotが実現する“構想から実行”の業務基盤

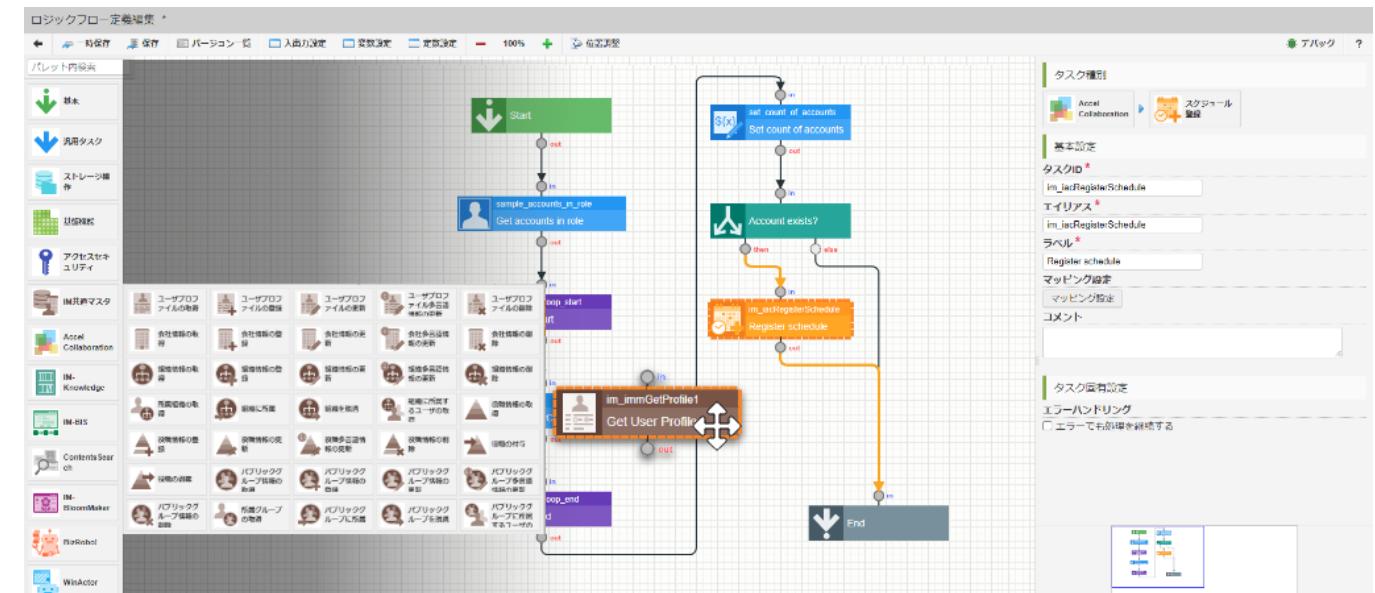
③スピーディなプロトタイピング化

Accel Studioによるスピーディなプロトタイピング化

Accel Platform上のアプリケーション開発機能
「**Accel Studio**」を利用すれば、Webブラウザ上で簡単に画面を作成できます。

Accel Studioでは、プログラミングの知識がなくても、タスクをドラッグ＆ドロップして配置して線でつなげるだけで、ローコードでビジネスロジックを作成できます。

エンジニアとしての経験がない方でも、アイデアを実際に動作するプロトタイプとして実装可能です。



IM-Copilotが実現する“構想から実行”の業務基盤

④生成AI×ローコードによる迅速な実装と継続改善

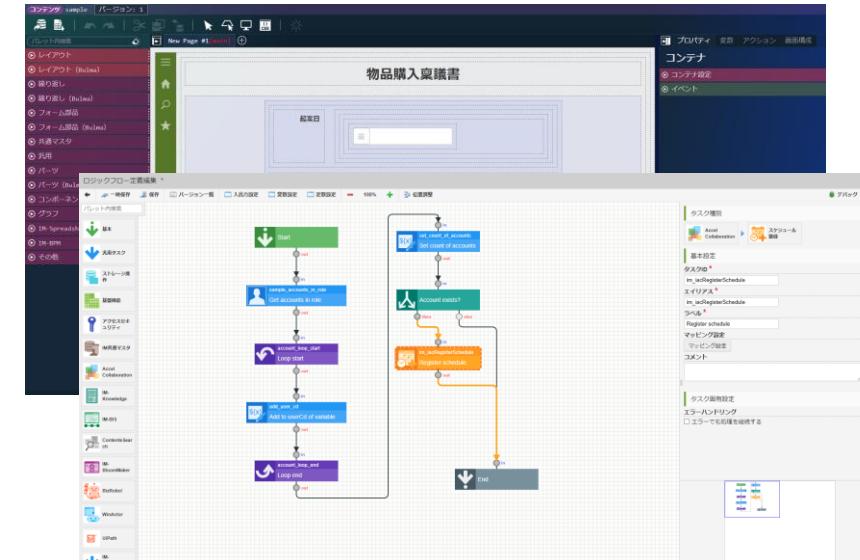
IM-Copilot×Accel Studioによる迅速な実装と継続改善

Accel Studioによるローコード開発により、プロトタイプからの迅速な実装が可能となります。

さらに、リリース後も実際のユーザーの利用状況や使用感を踏まえた改善点をヒアリングし、IM-Copilotにより改善を進められます。改善した画面を見せつつ意見を再度収集して、関係者との合意形成を含めた改善プロセスを高速に回します。

変更が生じた画面項目や業務ロジックも、Webブラウザ上の操作のみで行えます。システム運用を止めることなく変更・リリースができる点もポイントです。

Accel Studio



Co IM-Copilot

POINT

業務改善は、継続的に取り組み、現場に根付かせることが重要です。

IM-CopilotとAccel Studioによる迅速な実装とフィードバック反映の反復により、業務改善の定着を促進できます。

まとめ

本資料の主要なポイントをまとめます。

- ✓ 構想止まりにしない業務改善のカギは「構想」「設計」「実装」の接続です。
- ✓ 業務改善はアイデアだけでは前に進みません。再現性のある要件定義と迅速な業務実装を可能にする環境整備がカギとなります。
- ✓ 生成AI×ローコード開発により、スピーディーな要望実現と継続的な業務改善を実現するシステム基盤の構築をサポートします。

生成AI×ローコード開発を実現するための基盤として、**IM-Copilot×Accel Studio**は有効な選択肢となります。

「業務改善の要望を受けるものの手が回らない」「再現性のある取り組みが実現できていない」という方は、ぜひIM-Copilot×Accel Studioによる業務改善プロセスを検討してみてください。





株式会社NTTデータ イントラマート

東京都港区赤坂四丁目15番1号 赤坂ガーデンシティ5階



<https://www.intra-mart.jp/>



contact@intra-mart.jp

- 掲載内容は2025年8月現在のものです。
- Intra-mart は株式会社NTTデータ イントラマートの登録商標です。
- その他の各種製品名は、各社の製品名称、商標または登録商標です。